



視点

北欧性教育視察研修報告 ～幸福度と「子ども観」～

2025年9月25日から30日までの6日間、一般社団法人ソウレッジ主催のオランダ・デンマーク・スウェーデン性教育視察研修に参加しました。私には、包括的性教育（CSE）が義務化されたこれらの国々で、人々の「幸福度」の高さと性教育がどのように結びついているのかを、自らの目で確認したいという強い思いがありました。また、長年の学習を経て思わずに残る、性に対するネガティブな感覚を解消したいという個人的な動機もありました。

参加者は、ユースウェルネス室長、学生、自立支援ホーム職員、新聞記者、ウェルネスブランド運営者、そして養護教諭である私の計6名で、多角的な視点から対話を重ね、研修に臨むことができました。視察先は、スウェーデンとデンマークのユースクリニック、CSE提供学生団体IMCC、オランダの中高一貫校など計5か所でした。さらに、現地教員やルトガース財団職員など、3名の方の講話から知見を深めることができました。

人口も国土も大きく異なる北欧3か国と日本を一概には比較できませんが、日本とは異なる点で特に強く印象に残ったのは、社会の根底に流れる「子ども観」の違いです。日本では儒教の影響からか、集団の調和や礼儀が重んじられています。教師は「先生」と呼ばれ、風紀を乱さない子どもが「良い子」とされる風潮が少なからず残っています。一方、デンマークでは教師を「先生」とは呼ばず、教師・生徒間のパワーバランスをフラットにしています。また、子どもが「自分の意見に力がある」と感じられる主体的な体験を重要視します。この姿勢は保護者にもあり、「親はダメと禁止するのではなく、まず子どもの話に耳を傾けること」が重要だとされています。私が日頃から大切にしている「子どもには子どもの理由がある」「考えて、良い行動を起こす力がある」と信頼し、支持する態度が、北欧社会の当たり前の「子ども観」として存在していました。

このような「子ども観」の背景には、子育て世代の働き方も大きく関わっています。オランダでは親の送迎が必須とされているため、時短勤務が一般的です。教員は2人体制で1つの学級を担い、ストライキで声をあげています。人種もセクシュアリティも多様な社会で、投

票率85%と政治を信頼している様子は、彼らの高い幸福度を維持する重要な理由の一つだと感じられます。

オランダのNEMO科学博物館では、「人間」をテーマにした常設展示の中で、キスや性交、性の多様性など、性教育で扱う全てが学べるコーナーがあります。また、気候変動のコーナーが隣接しており、「性は自然なこと、科学的なこと、生きることであり、学ぶ価値のあるもの」だと感覚的に理解できるようになっています。図書館には性に関する絵本が多く揃い、薬局にはコンドームコーナーにセルフプレジャーグッズが並んでいました。こうした点から、性的欲求が自然なことであると受け入れる文化が社会全体に根付いていると感じました。

デンマークでは、SNSの影響で小学校高学年女子のウェルビーイングが低く、自殺や不登校などが社会問題となっているため、ウェルビーイングを高める施策が必要とされています。一方で、性教育は義務化されているものの、実施時間は30分～3時間など学校によってまちまちです。教員養成機関で性教育を学んでいるオランダでも「学校で役立つ性教育を学んだか」という質問への回答が47%に留まるなど、依然として課題は残されています。

しかし、子どもの権利を基盤とした同意と尊重を学ぶ教育をはじめ、関係性を重要視する学校や家庭教育、子どもが性の問題を抱えても自らの権利としてサポートを受けられるユースクリニックなど、社会全体で子どもを支え育む基盤が、子どもの幸福感を高めていると確信します。

視察後、私は「性ってとっても自然」「50年経てば世の中きっと変わる」と思っています。これからは、子どもが権利を保障され、ウェルビーイングな状態にアクセスできる、豊かな関係性や科学的な性の知識を得られるような学校と社会づくりを目指します。



齋藤 麻里
（“人間と性”教育研究協議会 きたみサークル）